(32)『亀井勝一郎全集』（講談社）第六巻二七二頁下段。
　亀井勝一郎はさらに「慈悲とは、あはれみや同情ではない。慈悲とは何よりもまづ凝視力だ。いかに隠された心奥をも透徹してみつめてゐてくれるその眼差にちがひない。愛といふ言葉を以てしてもよい。絶えず自分をみつめてゐてくれる、その凝視の持続性こそまことに愛とよぶにふさはしいではないか。」（二七三頁上段）と続けている。「我が精神の遍歴」（二六七頁以下）の章より引用。
(33) 注(10)に同じ。第二巻一七四頁、短編小説「隣室の客」より引用、かつ参照した。
(34) 注(10)に同じ。第七巻六二五頁。
(35) 注(10)に同じ。第六巻二五六頁。
(36) 注(10)に同じ。第五巻三三頁、「写生断片」の章より引用。
(37) 注(10)に同じ。第五巻四二頁、「本誌『為桜』過去一個年（ママ）間の文章に就いて」の章より引用。
(38) 注(10)に同じ。第五巻五九頁、「写生文をつくれ」の章より引用。
(39) 注(36)に同じ。明治四二年二月二五日発行『為桜』第三六号所載「写生断片」の冒頭文より引用。
(40) 間場寿一編『地方文化の社会学』（世界思想社）のなかで、菅康弘が「第七章　交わることと混じること――地域活性化と移り住む者」（一五〇頁以下）と題し、topophilia（トポフィリア）とは、「場所と情緒を結びつけるもの。感情とその対象は切り離せない。環境から与えられた刺激を、形をもったイメージに転化させる力が働く。感情と環境が結節する概念である。広げれば郷土愛。トポフィリアとは単に審美的な評価ばかりではなく、身体的接触、健康、過去の認識、歴史的連続性や出生所有といったものを媒介に、愛国心、家族愛、はては自己愛を生成する。」（一六六頁）と述べている。「愛着の出自・愛着のゆくえ」の項より引用。
(41) 和辻哲郎『風土――人間学的考察』（岩波書店）二六頁。
(42) 上山春平編『照葉樹林文化――日本文化の深層』（中公新書）、佐々木高明『照葉樹林文化の道――ブータン・雲南から日本へ』（ＮＨＫブックス）、そして坪井洋文『民俗再考――多元的世界への視点』（日本エディタースクール出版部）などに教えられた。
(43) 注(27)に同じ。三五一頁から三五二頁。夏目漱石『『土』に就（つい）て」より引用。
(44) 文化教養とはその土地や場所、地域に息づいている古典ではないのか。文化教養を意味するcultureは、cultivateに等しく耕し、培い、紡ぎ、醸し、慈しんできた風俗習慣、民俗、仕来たり、伝統、言葉などの古典（classic）、即ち洗練されながら今に伝えられているものなのではなかろうか。そうした多種多様な古典を改悪したり破壊したり喪失したりする進歩発展開発スピード化至上主義（史観）が、昨今の複合汚染や合併症の如き弊害を多発させているのではなかろうか。温故知新、もっと古典を学ぶべきではなかろうか。加地伸行『〈教養〉は死んだか――日本人の古典・道徳・宗教』（ＰＨＰ新書）にも教えられた。
(45) 保坂弘司『日本文学の新系譜』（旺文社）九二頁。

附記　本誌『飯岡秀夫教授退官記念号』に拙稿をも加えて戴き、誠に有難いことと関係各位に御礼申し上げます。
　この拙稿は、飯岡先生の御尊顔を瞼に拝しながら万感の思いを一字一字に託して手書きしたものです。愚生が着任以来の十六年以上もの永きにわたり、公私共に身に余る筆舌に尽くしがたい御厚情御高配、御指導御鞭撻、お力添えを賜り、御厚誼に与かって参りました過ぎし日々を想起しつつも、御恩に報いられる何ものもありませんので、今日の愚生の力量を振り絞り感謝の意を込めて綴りました。それでいて既発表との趣意の一部重複の謗りは免れませんので、またしても「ちばさん、いいものを書かなきゃだめだよ」とお叱りを頂戴し、諭されるやもしれませんが、飯岡先生をも含め『土』との出逢いが忘れられない「相逢（あふ）」の切なさを御賢察賜りたく、浅学菲才の愚身を省みず申し上げる次第であります。
「飯岡先生　ありがとうございます。本当にお蔭様です」と、益々の御健勝と御活躍を祈念しつつ御礼の御挨拶を申し上げます。

平成十六年十一月二十五日　　謹識

(7) 注(6)に同じ。
(8) 注(5)に同じ。第十四巻八二一頁。
(9) 浅野晃『闘争の思索』(教材社) 一三八頁、「文化の闘争」の章より引用。
(10) 『長塚節全集』(春陽堂) 第五巻十二頁、「竹の里人 (一)」の章より引用。
(11) 浅野晃『剣と美　私の岡倉天心』(日本教文社) 一六九頁。今は亡き恩師の浅野晃先生は「明治をかえりみるとき、いずれの方面にあっても、粉骨砕身の戦いをやったのは多くの田舎者であった。いかにしても祖国の独立を守りぬかねばならないという田舎者の緊迫したheroicな感じ方、思いつめた考え方、余裕のない体当たりの行き方、これが大きな働きをしたもののように思われる。相手は強力な侵略者であった。かれらの侵略を防ぎながら、おのれを高く打ち樹ててゆくのである。子規の仕事や天心の仕事が、いかに力強いものであったかが察せられよう。」と、「天心・子規・漱石」の章で述べている。
(12) 南博『日本的自我』(岩波新書) 五七頁。
(13) 『子規全集』(アルス) 第十五巻三九一頁。
(14) 『左千夫全集』(岩波書店) 第五巻一九四頁、「正岡子規君」の章より引用。
(15) 平輪光三『人間　長塚節』(角川書店) 六八頁。
(16) 注(10)に同じ。第六巻三三三頁。
(17) 注(16)に同じ。三三四頁。
(18) スタンダール (大岡昇平訳)『恋愛論』(新潮文庫) 十四頁。
(19) 注(16)に同じ。二一四頁。
(20) 小著『「可惜」命の文学』(双文社出版) を一読して戴ければ有難い。「可惜」とは勿体ない、残念だ、という意味で使う。
(21) 『子規全集』(講談社) 第五巻四三八頁、「ホトトギス第四巻第一号のはじめに」(明治三三年十月三〇日) より引用。
(22) 例えば、『土』と「可惜」の精神、『土』のなかの「死」、『土』論――水と義憤の「動機」考、『土』論――勘次・お品の「夫婦愛」考、『土』の表現考――「振りがな」を中心に、いずれも他の拙稿と共に『「可惜」命の文学』(双文社出版、一九九一年十二月五日発行) に加えた。『土』に関するその他の拙稿は小著『悲しみの文学』(高文堂出版社、昭和五七年五月二五日発行)、小著『「近代」と闘った人びと』(高文堂出版社、平成六年九月二〇日発行) にも加えてある。
(23) 『啄木全集』(筑摩書房) 第四巻九九頁下段、および一〇三頁上段、明治三九年の『林中書』より引用。振り仮名も原文通り。
(24) 伊豆利彦「日本近代文学と天皇制」と題する論考より引用。『日本文学講座』(大修館書店) 第六巻二〇頁。
(25) 小田切秀雄『日本近代文学』(青木書店) 二一〇頁から二一一頁。
(26) 「世間」については、井上忠司『世間体」の構造――社会心理史への試み』(ＮＨＫブックス)、阿部謹也『「世間」とは何か』(講談社現代新書) などを参照した。
(27) 長塚節『土』(新潮文庫) 四三頁より引用。『土』の引用は新潮文庫に拠った。『長塚節全集』(春陽堂) の第一巻が『土』である。
(28) 『柳田國男全集』(筑摩書房) 第十二巻一六三頁の「神を助けた話」や、第二七巻のなかの「子安地蔵」(二九九頁) などを参照した。
(29) 中野孝次もまた『清貧の思想』(文春文庫) のなかで、「関東の日本の農村にはまた、『ものころし』ということばが、これも今は廃語になりましたが、ありました。これは、たとえば畑の作物を都合で完熟させないうちに廃棄せざるをえないとき、『あったらものごろしだなあ』というように使う。どんな物でもそのいのちを全うさせないで殺すことを罪深い行為と見做す感覚から生まれた、いかにも農民の心から生まれたらしい、いい言葉だとわたしは思いますが、こういう言葉を作りだしたというのも、かれらはその作るものを、米でも野菜でも、たんなる市場価値においてではなく、生命ある一つのいのちと感じていたからです。」(二二九頁) と述べている。今日における市場経済や減反にともなう「青田刈り」とは明らかに異なる。「あったら」は「可惜」に等しく、勿体ない、残念だ、という心情を表している。
(30) 注(27)に同じ。三五〇頁。夏目漱石『土』に就て」より引用。『漱石全集』(岩波書店) では第十一巻五九〇頁。
(31) 注(27)に同じ。三五二頁。夏目漱石『土』に就て」より引用。『長塚節全集』(春陽堂) では第一巻六頁。

それは「地元」の風土に培われ環境に育まれた作者・長塚節の人間性を反映した思想であり『土』の特色である。

『土』は人や社会、そして地元からなるそれぞれの「環境」が三位一体となって結実した作品である。即ち、先師の恩や関係者の高配や厚情に報いようとした長塚節が、明治三、四十年代の、下総国岡田郡国生村（現在の茨城県結城郡石下町国生）という地元の、時に小作人と呼ばれていた貧農一家の実生活を克明に描写した物語である。勘次一家の暮らしは辛惨に満ち、自然や制度は極めて苛酷であり不条理である。だからこそ政治的な抑圧や矛盾、解放されがたい社会的な慣習などのなかにあって、どこまでも人間として生き抜こうとする精神力を失わず、忍耐強く生きる勘次や卯平、娘のおつぎ、そして惜しくも病死したお品などの言動に感嘆しながら読者の生命力や漱石のいう「菩提心」などを引き出し、ヒロイックな人生へと奮いたたせてくれるのではなかろうか。

『土』は作者・節の信念と資質が人間の真実を執拗なまでに描き続けさせた労作であるということを如何なる人も認めるであろう。その理由は「道徳的生活への思慕である。いかにすぐれた文学であつても、それが不道徳を教へるものであつたなら、遂に永遠の価値を贏ちえることはできない。永遠を貫くものは『事』でなくて『心』である。」[45]という保坂弘司のことばに要約されるであろう。つまり、『土』に描かれた百姓という生業や貧しい暮らしは生き抜く手段や条件であり移り変わり得る「事」である。いつの世のいかなる環境にあっても問われるのは「心」なのだということを教えているのである。だから昨今の、便利だとして豊富な「もの」に囲まれ、効率的に早急に「事」を処理しようとする「事」をよしとする近代的な環境にあっても「心」の有り様、即ち「人間」としての生き方が問われているのである。『土』の如き物語は　人生　の別称に等しく同義語に他ならない。その　人生　には出逢いと別れがつきものであり、始まりがあれば終わりがある。心に刻まれた物語は繰り返し蘇り語り継がれていくであろう、『土』という物語に限らず。

（ちば　みつぎ・本学地域政策学部教授）

〈注〉

（1）「無痛文明」については、森岡正博『無痛文明論』（トランスビュー）を参照した。「無痛」の皮肉を指摘している。

（2）「ファーストフード」については、三浦展『ファスト風土化する日本――郊外化とその病理』（洋泉社）を参照した。また、三浦氏の『「家族」と「幸福」の戦後史――郊外の夢と現実』（講談社現代新書）も政策の矛盾を指摘している。

（3）「ケータイを持ったサル」については、正高信男『ケータイを持ったサル――「人間らしさ」の崩壊』（中公新書）を参照した。正高氏は「はじめに」のなかで「今の世代の問題の萌芽は、前世代にあることも指摘してある。ケータイ世代に集約されるサル化は、二〇世紀一〇〇年間の日本の社会変化の帰結であると私は考えて、最終章にまとめてみた」（Ⅳ）と述べている。また、小谷野敦『すばらしき愚民社会』（新潮社）なかでは、サルにも等しい「愚民」の詳細について指摘している。いずれも進歩の反動や逆説、皮肉、矛盾と思わずにはいられない。

（4）「スローライフ」については、辻信一『スロー快楽主義宣言！――愉しさ美しさ安らぎが世界を変える』（集英社）を参照した。

（5）『漱石全集』（岩波書店）第十一巻二三七頁から二三九頁。

（6）注（5）に同じ。二三八頁から二三九頁。

我々と同時代に、しかも帝都を去る程遠からぬ田舎に住んでいるという悲惨な事実を、ひしと一度は胸の底に抱き締めて見たら、公等のこれから先の人生観の上に、又公等の日常の行動の上に、何かの参考として利益を与えはしまいかと聞きたい。余はとくに歓楽に憧憬する若い男や若い女が、読み苦いのを我慢して、この『土』を読む勇気を鼓舞する事を希望するのである。(43)

と述べ、『土』のなかに頻出する「世間」の特異性を読みとった上であろう、「世間を知る為だから」とも続けている。それだけ作者の節は「世間（体）」の動向や機微について注意を払っていたとも言えよう。例えば、お品の葬式の当日、手伝いに来ていた隣り近所の女房たちの様子（四章）に触れ、「女房等はその強健でかつ拡大された胃の容れる限りは口が之を貪って止まないのである。彼等は裏戸の陰に聚まって雑談に耽った。」とあり、そして「他人の悲哀はどれ程痛切でもそれは自己当面の問題ではない。如斯にして彼等の聚る処には常に笑声を絶たないのである。」という「世間（体）」の真実を看破したのである。こうした「世間（体）」の集合したのが共同体という社会であり、この「世間（体）」を生き抜くためには、「勘次は近所と姻戚との外には一飯も出さなかったが、それでも村のものは皆二銭ずつ持って弔みに来た。そうしてさっさと帰って行った。」という「義理（人情）」が欠かせないのである。「親の泣き寄り他人の喰い寄り」と言われるが、「遠くの親類より近くの他人」「情けは人のためならず」「困った時はお互い様」などという諺もあり、いずれも言い得て妙であり「互恵互助」の「義理（人情）」を欠かすことはない。「近代的」「民主的」になったと二言目には言うけれども、今日の私達もまた「世間（体）」と共に生きており、今に息づいている身近な「世間（体）」をして社会的な風土、地元の文化教養と言ってもよいのではなかろうか。(44)

『土』のなかの地元と呼ばれる風土や環境は、関東の中央から北東に位置し、筑波山麓の一角である。そこは筑波下ろしが吹き荒れ、遠く赤城山、男体山等の連峰を越えて来る季節風の通り道であり、その風は「西北」から吹きつけ　空っ風　とも呼ばれている。そこはまた日光、那須山系を源流とする鬼怒川が、麓の渓谷や田野を急ぎ、北関東の荒涼たる広がりのなかを蛇行し支流の水を集めて下り、やがて坂東太郎の異名でも知られている利根川へと続いている。鬼怒川の流れは雨や雪のために一時的に増水し濁流と化すことがあっても、多くの日々は穏やかな清流にしてその性質は淡水であり真水である。その水脈と関わり合いつつ水辺で暮らす人々の気質は、海鳴りや怒涛を子守り唄の如くに聞いて育った人とは自ずから異なるだろう。海水は言うまでもなく塩っ辛い。「塩を踏む」の喩えにもあるように障害や困難、辛苦を含んでいるようで極めて刺激的な素材であり環境であると言えよう。

自然とは決して山や川、土や水だけではない。季節もまた秋や冬、そして「春」ばかりではない。梅雨の如く「湿潤」の期間もありながら、『土』はおよそ冷たい五月の「東南風」や「西風」の吹く寒い頃と「落葉」の吹き溜まりのような暮らしぶりを描いてやまない。

ようとした自我意識の具現であり徹底である。

『土』は作者・節の家郷という地元で見聞きした貧農一家の実態を克明に描き出した物語である。地元の風土を反映した『土』は、和辻哲郎のことばを借りれば「モンスーン的風土の特殊形態」であり、人間の特性が「受容的・忍従的である」としても「この構造を示すものが『湿潤』である。」[41]という続けての論及は、照葉樹林文化圏[42]に該当しても『土』の舞台にあたる北関東の如く針葉樹の混じる落葉広葉樹林地帯において妥当なのかどうか疑問である。つまり、『土』の風土は水稲を中心とする照葉樹林文化に遅れた農耕民の集落が広がる地域であり、今も猶狩猟採集民の特質や環境を引きづり続けているのではないかと思われるほど「照葉」的な明快さに欠けている。それは稲作を強要され、稲作をもって征服され、稲作による仕組みをもって支配された縄文人という「遅れた農耕民」の遺恨の通底にも等しく、縄文人の血肉を継承し、支配者にまつろわぬ縄文人たちの呻きに掻き消されているからなのではなかろうか。その血脈を東国の土着の人・長塚節のなかにも見る思いがしてならないのである。

『土』のなかの自然描写からしても「受容的・忍従的」な人間の性向を醸しだす要因は、和辻哲郎のいう「湿潤」ではなく、むしろ「西風」にいびられながら育つ櫟（くぬぎ）や楢（なら）などの「落葉木」に等しく、夏の明るさや輝きの時を忘れ、ひたすら春の訪れを待つ求心的な心情を生み出し、忍耐強い朴納な人間性にならざるを得ないのではなかろうか。それは「冬」の如き人生を強いられている小作人にして貧農という勘次一家の実情を物語り、社会的な「環境」を含むものであろう。だから、いつでも「春は冬に遠くして又冬と相隣している。季節の変化を反復（くりかえ）しつつ月日は容赦なく推移した。」（一一章の終わり）とあり、「彼等を包んだ軟かな空気が春の徴候（きざし）でなければならなかった。」（二三章の前半）などという記述は、「天然人事」の一体化と酷愛ぶりを告白したものであろう。だからこそ勘次一家にとっては季節の春だけではなく、「冬」の如き貧乏から脱皮すべき「春の徴候（きざし）」、社会的に解放されるべき「春の徴候」を待つというのが「真実」に他ならない。私はこのような「真実」に動かされて今も猶愛読する所以である。

更に風土という環境に関して加えれば、『土』のなかには日々の暮らしと「湿潤」な状況との結びつきが希薄であり、また関わり合いを示すような具体的な描写もない。むしろ「櫟」や「楢」の木々がいつも「ごうっと打ちつけて」「一日苛め」られたり、「ひゅうひゅうと悲痛の響を立てて泣い」ていたり、「ざわざわと鳴」っているような荒涼とした風景ばかりを想起せざるを得ない。そのいずれもが「春の徴候（きざし）」を待ち続けるための意図的な創作であろうし『土』の特徴の一つであると言えよう。漱石もまた、

『土』を読むものは、きっと自分を泥の中を引き摺（ず）られるような気がするだろう。余もそう云う感じがした。或る者は何故長塚君はこんな読みづらいものを書いたのだと疑がう（ママ）かも知れない。そんな人に対して余はただ一言、斯様（かよう）な生活をしている人間が、

ぬ」という鞭撻教示に覚醒し、肥料の改良、竹林の栽培、炭焼きの研究、青年会の指導などの実践と平行両立させながら幾編かの紀行文や短編小説を創作しつつ、やがて長編物語『土』をものにしたのである。

――決して容易な過程ではなかった。たとえば、明治四十一年九月二十日付の久保田俊彦（歌人の島木赤彦）宛の書簡には、「炭焼の娘を書きし時は稿を改むること前後六回程にて、八頁のものに六ヶ月を費やし申候　恥をいはねば分り不申候へ共事実此の如く候然し其時以来人の文章を見て是非の判断に苦まぬ（ママ）ように相成候には自分ながら喫驚致候　佐渡も半年の苦心に有之候」[35]と語られている。文中の「炭焼の娘」とは、「炭焼き」を実践すべくして調査に赴いた房総半島の山中にて、「羊歯の中の著莪の花」に見たてた「お秋さん」という娘との出逢いや印象を写生という筆づかいにてまとめた短編小説である。また、「佐渡」とは紀行文「佐渡が島」の題名にて『ホトトギス』誌上に掲載され、漱石の目にとまり連載小説の依頼を受け、『土』の創作へと発展した経由については前述した通りである。――『土』の冒頭は次の通りである。

　烈しい西風が目に見えぬ大きな塊をごうっと打ちつけては又ごうっと打ちつけて皆痩（やせ）こけた落葉木の林を一日苛（いじ）め通した。木の枝は時々ひゅうひゅうと悲痛の響を立てて泣いた。短い冬の日はもう落ちかけて黄色な光を放射しつつ目叩（またた）いた。そうして西風はどうかするとぱったりと止んで終（しま）ったかと思う程静かになった。泥を拗切（ちぎ）って投げたような雲が不規則に林の上に凝然（じつ）とひっついていて空はまだ騒がしいことを示している。それで時々は思い出したように、木の枝がざわざわと鳴る。世間が俄（にわか）に心ぼそくなった。

これが子規が提唱実践し、かつ指導した写生主義の典型であり『土』の一貫した手法である。物語の舞台は節の家郷であり地元である。下総国岡田郡国生村にして鬼怒川沿の農村である。「西風」は地元の風土の特色を示し、「冬の日」は季節の彩りである。「世間」は地域社会の有り様を示唆し、登場人物たちの実情を予兆している。「ごうっと打ちつけ」「ひゅうひゅうと悲痛の響を立てて泣いた」という音象徴語彙（擬音語、あるいは擬態語）を用いた擬人法は「勘次一家」の状況を喩えているようである。「泥を拗切（ちぎ）って投げたような雲が不規則に」という直喩もまた、その土地（地元）を熟知した作者の観察であり創作である。いずれも「我が郷の田野の写生」[36]であり、自らが「写生文は或る天然人事を写生する文章で、其天然人事を読者の眼前に彷彿せしむるためには精細の描写を要する。精細に描写するといふことは一方極端に省略することである。即ち無駄な部分を省くことである。」[37]と言い、「真実を離れて文章はない。文章の値打ちは人を動かすにある。人を動かすのは真実以外に何物もない。」[38]とも述べている。こうした姿勢は、「余は天然を酷愛す」[39]という郷土愛や場所愛（topophilia）[40]を強調したような一文を紹介するまでもなく、自己の位相に根ざした筆致であり写生主義を獲得し

もよい。『土』を一読すれば今日の学校では教えられない、指定された「検定済教科書」、与えられた教材では学べないような内容だけに漱石が勧めるのも理由のない事ではない。漱石は次のように述べている。

けれども余はその時娘に向って、面白いから読めというのではない。苦しいから読めというのだと告げたいと思っている。参考の為だから、世間を知る為だから、知って己れの人格の上に暗い恐ろしい影を反射させる為だから我慢して読めと忠告したいと思っている。何も考えず暖かく生長した若い女（男でも同じである）の起す菩提心（ぼだいしん）や宗教心は、皆この暗い影の奥から射（さ）して来るのだと余は固く信じているからである。[31]

漱石のいう「菩提心や宗教心」を包む「世間（体）」や「義理（人情）」などから処世訓としての知恵を授けられ、教養を与えられるに違いない。

三、「地元」という「環境」

長塚節の『土』は小作人と呼ばれた貧農・勘次一家の私生活を、四季の移ろいや農作業、在所の風俗習慣を織り混ぜながら克明に描写された物語である。亀井勝一郎は「凝視力こそ慈悲である。[32]」と述べているが、作者・節の眼もまた鋭敏にして慈愛に満ちた筆致である。

『土』の作者・節は明治十二年（一八七九）四月三日、「山久（やまきゅう）」という屋号を持つ近郷近在きっての大地主の百姓家に生まれた。ところは下総国岡田郡国生村（現在は茨城県結城郡石下町国生）である。節の生前はさらに隆盛を極め、田畑を百町歩も所有していたという。節の父は入婿にして家業のほとんどを妻（節の母）に任せて政治に凝り、県会議員となる。やがて県会議長の要職まで務めるようになるが、「井戸塀政治家」の喩え通り、借財を重ねて家運を疲弊させてしまう。それでも節は地主の長男として「前後十一人の乳母が交代された[33]」と、自ら語るほどの境遇であったという。

長塚節は喉頭結核のため、大正四年（一九一五）二月八日、福岡県は九州大学の病室で三十六歳の若さで長逝するまで、病弱のため中学校（旧制。現在は茨城県立水戸第一高等学校）を中退したほどの身体で、家運をもり返すべくして文学活動と共に家業にも鋭意努力し続けた。全国各地にわたる旅先からの母宛の便りは、いかに節が先祖代々の生家を守り抜き、また再興しようとして心を痛めていたかを詳細に物語っている（節の「耕作手帳」なる手記もその一つ）。母に対して自らの死の二ヶ月前まで微に入り細にわたって、ある時は高圧なまでに家事と農事に、さらには手紙の書き方から小包の造り方にいたるまで注意を与えている。「名家は何処までも栄えしむべく[34]」（大正三年三月三十日付、門馬春雄宛の書簡）とばかりに奮闘したのである。その動機づけとなったのが、子規の遺訓に等しい「君には大責任がある。それは自ら率先して君の村を開かねばなら

道徳、事の善悪、言動などの伝統や習慣を教え、判断力を養い、かつ抑止力や自浄力を育む「文化」なのではないかと。「世間（体）」にこだわり注視することが、案外、判断や動機の基準となり、言動の自制や自浄、自省を促す機能を有していると思われるのだがどうだろう。「世間体が悪いから」と気配り目配りすれば自ら言動を慎むことであろう。だから「教養」に乏しい「世間知らず」が、不祥事を起すたびに「世間をお騒がせしました」「世間に対して申し訳ありません」などと詫びたり言訳したりするのである。

『土』のなかの到る所に「世間」という言葉が出て来る。夫の勘次や妻のお品をはじめ、登場人物たちの言動が、その「世間」を鑑みて行われているという説明が多い。「義理」もまた「世間」にとって不可欠な言動として描かれている。「世間（体）」や「義理（人情）」は共同体のなかで永年に亘って洗練されてきた、いわゆる社会的な規範であり言動の基準であるということを改めて教えられたのである。「世間（体）」や「義理（人情）」の機微は地域や共同体によって違いがあろうし社会的にも歴史的にも可変的であろうが、人という文字が支え合いを表わし、人間という漢字が「人の間」と書く熟語だということも関わり合いを必然とし、不可避な事だと諭しているように思われる。共同体のなかで紡いできた「世間（体）」や「義理（人情）」に秘められている意味は普遍的であり、今も重要な機能を果しているということを強調しておきたい。

例えば、「堕胎」が原因で亡くなったお品について「勘次が去ってから（利根川の開削工事へ出稼ぎに行ってしまったこと。引用者）お品はその混雑した然も寂しい世間に交って遣瀬（やるせ）のないような心持がして到頭罪悪を決行してしまった。お品の腹は四月（よつき）であった。」とあり、やがて「葬式の次の日は又近所の人が来た。勘次はその借りた羽織と袴を着て村中へ義理に廻った。」とある。お品にとっては「決行」の誘因と思われる「寂しい世間に交って」自制心を失い、抑止力とはならなかった。「寂しい世間」にさせたのは、お品が「お品はその時も勘次の判断を促して見た」とき、夫の勘次は「俺もそうゆわれても困ったから、おめえ好きにしてくろうよ」と言い残して利根川の開削工事の出稼ぎに行ってしまったという伏線を勘案しなければならず、お品の孤独感が然らしめたのである。

また、十五歳にして母を亡くした娘のおつぎは、父の勘次と三歳になる弟の与吉との三人家族となり、否応なく一家の柱の如く働きながら成長する。母親代わりのおつぎは弟の面倒を見ると共に、父親の言動や東隣りの内儀さん（地主）をはじめ村人たちと関わり合い、やりとりを眼のあたりにして「世間（体）」や「義理（人情）」の何たるかをいち早く覚え、大人びていくのである。勘次一家は漱石に、『土』の中に出て来る人物は、最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、ただ土の上に生み付けられて、土と共に生長した蛆（うじ）同様に憐れな百姓の生活である。」[30]と評されたように、確かに貧農なのだが、貧農だからと言って人間性に欠けているということはない。「土と共に生長した蛆同様に憐れな百姓」たちにとっての学校が村の共同体であり、自然の移り変わりや農作業が教材であり、「世間（体）」や「義理（人情）」が教科書代わりと喩えて

と歴史、そこには必ずや生命の永遠を希求する――自らの永遠ではない――風俗習慣という思想や精神のあることを見逃すわけにはゆかない。勘次一家のような貧しさや小作人という身分は、時の行政や制度、法律、あるいは風土、気候などの自然的な条件に作為され強いられた結果であり、農民が自ら求めたわけではない。だから今日とて資本主義だ、市場の原理だと称して米麦をはじめとする野菜や果物などの農産物、魚介類などの海産物、杉だ松だ欅だという木材や竹材などから工業製品、電気やガス、石油、ガソリン、不動産と呼ばれる土地も毎年「評価」が上がった下がったと報じられ、そして水（そのうち環境税が課せられ、空気も有料になるであろう）に至るまで、何もかも価格、値段がつけられて貨幣で交換するのだから、貨幣を持たなければ貧乏するのが当然だとばかりに作為されている。従って、貧乏は貨幣の量で決まるのだから貨幣を万能視する幻想的な価値観や固定観念を増殖させ、貨幣に心血を奪われる不自由な人間が大量に発生し、ものが大量に消費されるというのも無理からぬのである。それこそが「もの殺し」[29]ではないのか。だから手に入れた「もの」の限定的な機能に迎合したり追従したり、あるいは拘束されながら人間としての情緒や感情、判断を摩滅、摩耗させ、自律的な倫理観や道徳心などを喪失し兼ねない「市場原理」に疑問を覚え、資本主義経済の未来を危惧するのは決して私ひとりではないだろう。「市場原理」と称する競争に煽情され、「貨幣」や「もの」の獲得に終始し、「価格」の上下に一喜一憂する社会全体の風潮を是正するための行政や政策、法律などを作為せざるを得ないのならば、地球の原理や自然の生態に適った仕組みを創造することが未来のために必要不可欠にして急務なのではなかろうか。今や、より便利で、より高性能、高品質、多機能なものをより低価格で大量に提供したいとする宣伝や、進歩・発展・開発・スピード化を至上命題の如く拘泥して新型を装い、新発売を謳いながら「変化」を繰り返しては幻惑を醸し、熟考を削ぎ購入願望を煽るような作為による腐敗や弊害、侵蝕に目醒め、今あるものを大切にしたり満足したりする「得意淡然」の心を育む自足経済の確立を期待したい。

これまでのように「近代化」にかこつけての経済の高度成長政策や土地の功利的な利用、都市の合理的な再開発事業などという名目を掲げての作為は、一部の人の自己満足を反映したり利己主義を露呈したりするだけで自然の犠牲を拡大し、地球の負担を増大させるばかりではなく、人工的な速度が自然の生態を狂わせ破壊するようになったのである。即ち、市場原理という経済の仕組みや作為による人間中心主義の矛盾、反動、陥穽、皮肉、ジレンマ、パラドックス、コンフリクトなどを伴う蟻地獄の如き自業自得の窮地に溺れながらも居直り、虚勢を張り、負け惜しみからさらなる進歩、発展、開発、スピード化を吹聴、嘯（うそぶ）き、地獄の沙汰も金（かね）次第　とばかりに「もの」の消費を貪っている。――では、なぜこうした社会悪が多発しながらも放置されるだけで、何ら社会的にして人間的な抑止力や自浄力というものが生じないのであろうか。そこで私は『土』を読みながら考えたのだが、『土』のなかに頻出する「世間（体）」や「義理（人情）」が、人との関わり合いに於ける礼儀作法、倫理

し、解決の方途を探求、選択、実践しながら理解、改善、理想の獲得を果すというものである。だから小田切秀雄が言うように、「自然主義の確固たる近代的要求と現実追求のたたかいは、情熱と関心が『私』の『告白』という狭い限界にとどまって客観的世界の追求にまで文学的におしひろげられなかった。」としても、「自然主義者には意識的な、自覚された『社会』や『歴史』がなかったということによって、この社会的意義を不当に低く評価することは許されぬ。」[25]のである。我が『土』はこの「社会的意義」を有する物語としても、自然主義文学の代表的な作品としても高く「評価」されているのである。

『土』は「『私』の『告白』という狭い限界にとどまって――」という印象は否めないが、次のような行為や描写は「私」の「告白」にとどまらず、息づいている「世間」[26]という社会を道連れにしていると思われるがどうだろうか。つまり、「お品は自分の手で自分の身を殺したのである。」（第五章の冒頭）と語られているように、勘次の妻・お品は自らの手で行った「堕胎」が原因で亡くなり、葬儀を手伝う村人たちに、

「お品さんも可惜命をなあ」と一人が思い出したように言った。

「本当に他人のやらねえこってもありゃしめえし」他の女房が相槌を打った。

「風邪引いたなんてか、今度の風は強えから起きらんねえなんて、しらばっくれてな」

「死ぬ者貧乏なんだよ」[27]

などと蔭口を叩かれている。確かに「堕胎」は貧しい暮らしや悲惨な共同体を裏づけている。それは「間引き」の一手段であり、生まれてもやがて「口減らし」のために「年季奉公」へと急かされることもある。村のお地蔵さんは水子観音などと共にそれらの魂を祀り、その霊を慰めるために建立、安置されているのだという野仏や石仏にまつわる昔話や伝説の聞こえないではない。岩手県遠野地方（に限らず東北地方全域）の「座敷童子」（家の守り神でもある）の伝説は、水子たちの亡霊が親を恋しがるあまりに家や枕もとに姿を見せるのだという。

『土』のなかの「堕胎」はもとより「間引き」や「口減らし」は、貧しい暮らしを余儀なくされた農民たちの封建的な社会を生き抜くための苦渋の自衛策であり、村落共同体のなかで培われてきた自我意識や連帯感に他ならない。「堕胎」による胎児や水子で間引かれた屍は祖先の傍に葬られ、その霊を一緒に弔いながら自らもまたその傍に逝く。親子として肉親としての情や絆は決して断ち切られはしない。今日に於ける新しい水子観世音菩薩像に限らず、家ごとの墓地にある小さな墓石や古い土盛りがそれらの歴史的にして社会的な事実を証左するものであり、村のそこここにあるお地蔵さんの赤い布が母子の絆や縁の結ばれていることを示しているのだという。[28]

私は『土』のなかの「お品」のように貧しさ故に「堕胎」せざるを得なかった農民や社会を思わずにはいられない。農民たちの社会

九

けには「富国強兵」の帝国主義の圧政を貫き、国内向けには「殖産興業」「脱亜入欧」を推進する立憲君主制を建て前とした藩閥中心の強権であった。伊藤博文の暗殺事件（明治四十二年十月二十六日）、明治四十三年（一九一〇）五月の大逆事件を経ての十月に韓国併合、同年には文芸雑誌『白樺』が創刊され、理想とする人道主義が高唱された。翌四十四年九月には女性たちの手によって文芸雑誌『青鞜』が創刊され、女性解放運動の先駆を告げた。

こうして明治三十六年に結成された平民社（幸徳秋水・堺利彦などが設立）が二年後の同三十八年に解散させられたという例や、大逆事件（明治四十四年には幸徳秋水をはじめ十二名が死刑）を挙げるまでもなく、心ある人々が時の政治権力や圧力との命がけの闘争を強いられた。従って、多くの人々の抵抗力は弾圧によって低下しながらも、決して途絶したわけでも消滅したわけでもない。その時のレジスタンスは今も猶連綿と継承され、その後の不正や不善、悪徳、強権、暴力などに対する排斥、抵抗の運動や中止、改善を求める闘争、批判、抗議の活動などの光明となって点（とも）り続けている。

明治三十六年（一九〇三）には第一次桂太郎（長州藩士。三度の首相として明治三十五年の日英同盟締結、同三十七、八年の日露戦争、同四十三年の日韓併合条約締結などに当たる。一八四七―一九一三）首相のもと、西園寺公望（のちに第一次、第二次首相。一八四九―一九四〇）が政友会の総裁に就任するや「桂園時代」と呼ばれる政治が施行され、やがて「大正の政変」と言われる激動の社会へと突進して行くのである。第一次桂太郎内閣（明治三十三年より同三十九年）は、政友会の伊藤博文内閣総理大臣（第四次にわたって務めた）の後任であり、日清戦争後にして戦争に対する賛否論議が盛んとなり、平民社（平民新聞を発行。明治三十八年に解散させられる）が結成されたり、同三十七年の日露戦争の勃発に伴い愛国婦人会が創立されたりするという保革両面の社会的活動が表面化していくのである。いずれの運動や活動にあっても国家権力の強化、増大を図る政策に翻弄されながらの迎合、追従であり反発、抵抗であった。それだけ国民への影響も顕著に、かつ深刻になってきたという証左でもあろう。

――このような政治主導に対する国民の無力感、虚脱感などの蔓延が、心ある人々の危機感、緊張感を生み出し、事実や現実を直視し抽出するという「自然主義」を受容させたのだと思われる。だから「無理想無解決の自然主義がこの時代の支配的な文学となったのは偶然ではない。」[24]という指摘もあるが、眼前の事実や日常の現実を直視し、ありのままに描写することが理想の希求、解決・改善への手段、そして階梯だったのではなかろうか。政治に限らず色々な抑圧や拘束・不自由からの解放を悲願とする自覚が「自然主義」を必要とし、獲得させたのではなかろうか。つまり、「富国強兵」という意図的な作為による政策や戦争、人工的・機械的な「殖産興業」という産業や工業などによってもたらされつつあった弊害や陥穽、矛盾、皮肉、ジレンマ、パラドックス、コンフリクトなどをありのままに認識することが「自然主義」の眼目や方法であり神髄である。「自然主義」の観点や眼力（がんりき）が事の本質、及び真偽、善悪などを識別

八

たような成果を生み出し、ヒロイックな生涯（大正四年二月八日長逝。奇しくも子規と同じように享年三十六歳）であったと思われる。節は子規との出逢いによって人という貴重な「環境」に恵まれ悲願を獲得し、その思いに報いるべくして努力と田舎という郷土、地元にこだわりながらの後半生あったと言えよう。いずれも不断の大事である。

ニ、「社会」という「環境」

長塚節の唯一の長編小説『土』は、日本文学史上で自然主義文学の代表的な作品として評価され、位置づけられている。一読すれば必ずや内容の特異性に気がつき、忘れがたい物語の一書となるであろう。私はこれまで色々な論題を掲げて拙稿をものにし公表してきたものの、[22]『土』の深淵さに及ぶはずもなく論究し尽くせるものでもない。

『土』が東京朝日新聞紙上に連載された当時（連載は明治四十三年六月十三日から同十一月十七日までの一五一回）は、明治二十七、八年の日清戦争を経て、同三十七、八年の日露戦争終結の後である。いずれの大戦にも大きな犠牲を払いながらも勝利し、戦勝気分の高揚と共に知的な啓蒙活動や政治に対する社会的な運動も旺盛になり、いわゆる大正デモクラシーへの胎動期を迎えていた。例えば、明治三十八年（一九〇五）九月、ポーツマス講和条約の締結によって日露戦争は終結したものの、ロシアからの賠償や補償が少ない、取れない、ことに不満を抱いた人々が、東京・日比谷（日比谷焼打事件）などの各地で講和条約反対運動を展開し、時の藩閥政府（政治）に反対した。

政府は抗議や批判をかわすかのように、韓国に統監府を設置し覇権の足場をつくった。翌三十九年二月には日本社会党（翌年解散）第一回大会が開催され、四十年（一九〇七）十月には早稲田大学教授の浮田和民が『倫理的帝国主義』を刊行し、藩閥体制を批判すると共に真の立憲君主制を訴えた。時を同じくして石川啄木は、「日本が僅々五十年間に驚くべき改革を成就した好運国であることは、予も亦是認する処である。さうして日本は今、立憲国である。東洋唯一の立憲国である。然し、と自分は問ふ、此立憲国の何の隅に、真に立憲的な社会があるのか？　真に立憲的な行動が、幾度吾人の眼前に演ぜられたか？　非立憲的な事実のみが跋扈して居る様な事はないか？　政治上理想の結合なるべき政党が、此国に於ては単に利益と野心の結合に過ぎぬではないだらうか？」と述べ、続けて――

戦争に勝つた国の文明が、敗けた国の文明よりも優つて居るか怎か？（中略）怎やら日本が文明国で露西亜が野蛮国の様だが、それは表面の事。日本人は与へられた自由と権利とを、どれ丈尚んで居るか、如何にして保持して居るか。[23]

などと社会の動向や人々の言動に傾注し、その実態について批評している。啄木の指摘に教えられるまでもなく時の政治は、海外向

り）の回顧談である。

やがて『土』の評判の悪いこと」が節の耳にも達したようで、連載中の明治四十三年九月十日付の書簡（岡三郎宛）に「成るべく早く結末をつけよとのことに有之候へ共、百卅（三十）回位にわたらねば済み申すまじく、段々厄介物にされ申候　社の営業部に於ては、殊に渋面致し居る由申候　女学生に喜ばれぬが一の原因と申候　小生も不評判は覚悟の前故、驚き不申候へ共、回数の短縮は堪へ不申候に付、社のためにはじめたること故に、只今にても中止すべき旨申し遣し候」[16]と伝えており、七日後の九月十七日付の書簡（齋藤隆三宛）では、「『土』は只今の処九十九回までの原稿とどけ置候へ共、全体にて百三十回以上に相成可申候　女学生に喜ばれぬ故に、社の営業部にては只今持て余しの由に有之候　然しながら書きはじめ候こと故、兎にも角にも結末まではつづけ申度と存居候」[17]と伝え、「不評判」を承知しながらも「結末までつづけたい」とする不退転の心意気が語られている。

こうして『土』は「女学生に喜ばれぬ」という「不評判」にも関わらず一五一回にわたって連載を続けられ、完結に到ったのは、新聞社における主筆・池辺三山の英断と理解はもとより、文芸欄の責任者であった漱石の支持と激励の賜だったのである。いずれも節の人柄と文才を信じ、特異な内容に寄せた厚情や高配であった。即ち、節にとっては利他愛の御蔭様にして、自らの人徳であったという他はない。利他愛の御蔭様とは、子規を敬慕にする節、子規を介しての漱石と節、漱石を介しての池辺三山や森田草平など、人とのつながりや関わり合いによってもたらされた厚意、高配、支援などの「結晶作用」[18]、即ち「人間関係力」とでもいうべき効果を意味するものである。私はこのような人とのつながりや人との関わり合いをして人による「環境」というのである。この「環境」はすべてが善良とは限らないが、節の場合はその「環境」に恵まれた御蔭様と、結果に到る過程の努力によって『土』の創造と完結を見たのである。「継続は力なり」というが、努力という奮闘が不可欠だったのである。節は自らの姿勢を友人の岡三郎に、「小生は自己の唯一の資本たる努力は毛頭をしみ申すまじく候　骨折ることを以て小生は唯一の武器と心得居り候　田舎者は到底田舎のことを書くより外は無之候」[19]（明治四十年十一月二十六日付の書簡）と伝えている。「骨折ること」をする、これが今は亡き恩師・子規の「遺訓」によって開眼した節の処世術であり、報恩感謝の心意気である。不惜身命にして、私のいう「可惜（あたら）命の精神」[20]の具現である。あるいはまた「志士仁人は生を求めて以って仁を害することなく、死を以って仁をなすことあり」（『論語』）という「仁道」に徹したとも言えよう。

節は家郷に拘泥し努力を惜しまなかった。その理由もまた、子規の「維新の大業は偏鄙の偏鄙の遠国の遠国の薩長土肥といふ田舎者によつて成就せられた。然るに文学のルネーサンスには田舎者があづかる事が出来ぬとあつては道理が合はぬでは無いか。」[21]という趣旨を含んだ「遺訓」に教えられた郷土愛の結実に他ならない。節は唯一の長編小説『土』の創作に掻き立てられ完結に到らしめた「人間関係力」、即ち人々と関わり合いながらの「環境」に培り出され

六

節の師・子規は前述した通り明治三十三年三月二十八日の初対面から僅か二年半余りの後、同三十五年九月十九日に病没した。享年三十五歳であった。その子規が長逝する一ヶ月前、愛弟子の節を叱咤激励する最後の書簡（明治三十五年八月十九日付）を送っている。子規は病床に伏しながらもその志の高さを示し、かつ慈愛に満ちた内容と思われるだけに全文を掲げたい[13]（原文には句読点はない）。

思ふに君の村では君の家一けんだけ比較的開けてゐて、他は尽く（コトゴト）野蛮なのに違ひない。そこで僕の考へるには、君には大責任がある。それは君は自ら率先して君の村を開かねばならぬ。学校も立てる（ママ）が善い。村民の子弟の少し俊秀ともいふべき者あらば、君は学費を出して（若く（モシ）は村費を出して）東京へでも水戸へでも出し、簡易農学校位を修業させてやるが善い。其外農談会とか幻灯会とかを開いて村民に智識を与へねばならぬ。委細は面会の節話すべし。

一家の私事だけでも忙しいといふやうな能無しでは役に立たぬ。其傍で一村の経営位には任じなくては行かぬ。

君は東京へ出て来ることを道楽か何かのやうに思ふて居るか知らぬが、それは大間違ひだ。時々東京へ来て益を得て帰るやうに務めなくてはならぬ。田舎に引込んでしまつてそれで忙しいなどと云つてるやうでは困る。

僕などへ物を贈らるるには珍しいものを要せぬ。水戸の名菓などよりは、君が手つくりの大根か蕪の方が善い。今度のやまと芋の如きは甚だありがたく感ずる。

子規が愛弟子の節に宛てた最後の便りは、文学に関する瑣末的な教示ではなく、これまでの行動を戒め、これからの生き方を諭した人間としての処世訓である。時に二十三歳の節にとっては文字通りの遺訓となり、その後の生き方を決定づけるに相応しい含蓄に富む重要な内容である。同志の伊藤左千夫に「先生と長塚との間柄は親子としては余りに理想的で、師弟としては余りに情的である。故に予は之を理想的愛子と名附けた。」[14]と評されたほど、生前の僅かな月日の間に師弟愛という「理想的」な一体感を紡ぎ醸し、死別後もなお揺ぎはしなかったのである。私はこのような「間柄」をして「相逢（そうほう）」というのである。

遺訓――それは今は亡き恩師と共に生きる者にこそ不滅の光明である。漱石の高配や厚情によって連載されることになった節の『土』は、「最初はせいぜい三、四十回くらいの約束であったが、六十回になってもまだ終らない。八十回でもまだ結末になりそうな様子が見えない。（中略）当時の長塚節は、故郷の実家で執筆していた。私は勿論社内で『土』の評判の悪いことなどは黙って置いたが、池辺さんの褒めていられることだけは通知してやった。それに気を好くしたものか、同君は書きも書いたり、八十回が百回で終らず、百二十回で終らず、到頭百六十何回（ママ）に及んで漸く結末に達した。まったく途方もない男である。」[15]と、節と新聞社との連絡役を務めた森田草平（後に『煤煙』『輪廻』などの小説を書く。漱石門下のひと

漱石は俳句を、という形式の違いはあったにしろ、二人の作品は子規の目に触れていたのである。

節は明治三十三年（一九〇〇）二月十五日、新聞『日本』の第二回の短歌募集の課題「森」に応募し、二首の入選に伴い掲載された。それに感激し自信を抱いた節は、感謝の表明と入門を決意し面会を求めて選者・子規の住む上野の根岸庵を問ねたのが同三月二十七日、二十一歳の時であった。――「さて、この二十七日というのは非常に天気もよい日であったが午後から出掛けた。黒塀をぐるっと廻って前に見て置いた門のところに出ると、立派な人力車が一台主人を待って控えて居て、そっと玄関を見ると客の下駄のようなのが二三足ならんで居る。思い切って這入ろうかと思ったが何となく気臆（ママ）れがして二三遍行ったり来たりした儘、とうとう門の扉を押し明ける勇気も出ないで悄々として帰って仕舞った。翌日は人に先んぜられないようにと思って午前に行った。」[10]と、子規の没後（子規は明治三十五年九月十九日長逝）、初対面の状況や様子、子規の人柄などの印象、そして思い出を『馬酔木』（明治三十七年二月二十七日発行の第九号に掲載）に寄稿している。

こうして明治三十三年三月二十八日の初対面以来、名実共に子規の門下生になったのである。節は「この二十七日というのは非常に天気もよい日であったが午後から出掛けた」と言いながらも、「黒塀をぐるっと廻って前に見て置いた門のところに出ると」とあり、事前に根岸庵の所在を確認しており、しかもその「二十七日」には「立派な人力車」を見たり、「そっと玄関」の様子を見たりしたため

四

か、「何となく気臆れがして二三遍行ったり来たりした儘、とうとう門の扉を押し明ける勇気も出ないで悄々として帰って仕舞った」という照れや遠慮は、自己を省みる冷静な判断であり、やがて師となる人を慈しむ優しさ、奥ゆかしい思いやりなどの人間性を如実に反映した行動である。意気地のない臆病者とは違い、状況を考察しての心ばえである。心を新たに日を改めて出直したところに、子規の助言や指導を得たり漱石に朝日新聞への連載を依頼されたりすることとなる人柄や人徳が偲ばれるというものである。

節の師・子規は長く病床にありながらも文学という志を忘れず多くの愛弟子を育てた。その「緊迫したヒロイックな感じ方」[11]や生き方が漱石との友情を育み、節や伊藤左千夫（歌人であり『野菊の墓』の作者でもある）を含めた多くの弟子たちとの共感や一体感を引き出し大きな足跡を残した。従って、困難を克服しようとする「ヒロイック」（志を貫こうとする緊張感、不純なものやでたらめな事を寄せつけまいとする潔癖感）な決意を秘め、艱難をも受容しつつ刻苦勉励に勤しむ超自我の心意気こそが子規をはじめ、節や漱石に見られるマゾヒズムの真相であり本質なのである。南博の「日本的マゾヒズムが、自嘲、自責、自粛のかたちをとって、自己の欠点、罪過、他者による規制の先取りによって、結局は責任の回避と免除をねらう心理的な防衛のメカニズムだ。」[12]という分析や説明は、志や悲願、目的をもたない小人や小才子、小利口、小賢しい小心者、その場凌ぎの虚栄や偽善に長じる愚人たちの心と言動を言い当てたものである。

い人である。しかも若い人に似合わず落ち付きを払って、行くべき路を行って、少しも時好を追わない。是はわざと流行に反対したの何のというむづかしい意味ではなくて、氏には本来芸術的な一片の性情があって、氏はただ其性情に従うの外、他を顧みる暇を有たないのである。（中略）最初余から交渉した時、節氏は自分の責任の重いのを気遣って長い間返事を寄こさなかった。それから漸く遣って見様という挨拶が来た。それから四十枚程原稿が来た。今の所余は『土』の一篇がうまく成功する事を氏のために、読者のために、且新聞のために祈るのみである。（中略）余が新しい作家を紹介するのは、ミルを以て自ら任ずるというより、かかる無責任な評論家の手から、望みのある人を救おうとする老婆心である。[6]」と、『門』の連載を了えた後に、後任の人と作品への期待を込めた「長塚節氏の小説『土』」と題する紹介文をものし、節に託した動機や経緯の説明、そして温かい激励を与えている。

漱石が無名に等しかった節の登用を決めた要因や動機の根底には、「型に入った批評家のために閑却され、多忙のため不公平を甘んずる批評家のために閑却されては、作家（ことに新進作家）は気の毒である。時と場合の許す限りそういう弊は矯正したい。『朝日』に長塚節氏の『土』を掲げるのも幾分か此主意である。[7]」（明治四十三年六月九日付「東京朝日新聞」）という理由のあったことも見逃してはならない。このような擁護や激励に先だって漱石（金之助という署名で）は節に奮起を促す次のような書簡（明治四十三年四月二十九日付）を送っている。[8]

拝啓其後は御無沙汰に打過候偖先般は森田草平氏を通じて突然なる御願に及び候処早速御聞届被下候段感謝の至に候其後草平君より再度の照回（ママ）に対する御返事正に拝見致候小生の小説はいつ完結するや実の処本人にも不明に候へどもごく短かくても九十回にはなるべきかと予想致居候只今六十回故今より御起草被下候へば小生も安心。万々一の事にて夫よりも早く片付候ても毫も心配無之故失礼をも不顧伺候次第に候御返事の趣にて一旦御引受の上は不都合なき由御申聞難有候東京と茨木（ママ）とは少々懸隔居候故自然懸念も相生じ杞憂相洩し候様の訳あしからず御高免願上候右御挨拶旁御願迄如斯に候　早々頓首

四月二十九日　　夏目金之助

長　塚　様

節は漱石の「今より御起草被下候へば小生も安心」という教示や助言に従い、「懸念」や「杞憂」を払拭すべき姿勢を示す意味も込めて「四十枚程原稿」を送り届けたのだと思われる。節はすでに漱石の期待や今は亡き師・正岡子規の恩に応報すべき覚悟を胸に秘めて書き始めていたのである。まさに「志定まれば意己ずから盛んなり」とも、「現実を直視する冷静と、困難を克服する決意とが、ここに新たに回復された[9]」のだとも言えよう。

長塚節と夏目漱石は正岡子規を介して知り合ったのである。共に新聞『日本』の文芸欄への投稿者として創作活動を始め、同紙文芸欄の選者という立場にあったのが子規だったのである。節は短歌を、

う。「吾、唯、足、知」という境地に至るのは難しいが、自足経済と呼ばれる「スローライフ」[4]の確立が待たれるのではなかろうか。

『土』は「もの」の少ない時代に書かれ、日露戦争（明治三十七、八年）後の農村（現在の茨城県結城郡石下町）社会を舞台にした物語である。根気強く一読すれば温故知新、急がば回われ、の教え通り、これまでの物欲、進歩発展、開発、スピード化、便利などの追求に余念のない近代化や合理化の至上主義と共に、市場経済に伴う弊害、陥穽、矛盾、ジレンマ、葛藤、皮肉などの多発に心を痛め、傷つき、苦悩、煩悶する昨今にあって、警鐘の役割を担い、猛省を促されるであろう真摯な作品であり、貴重な文化遺産であるということに覚醒するであろう。――私は再び読むことにした。

一、「人」という「環境」

長塚節の唯一の長編小説『土』は、明治四十三年（一九一〇）六月十三日から同十一月十七日までの一五一回にわたって、当時の東京朝日新聞に連載されたものである。この間の休載日は八月十六日から二十日までの五日間と、八月三十日、九月二十五日の計七日間だけであった。作者の節は時に三十一歳であった。『土』は連載を了えた二年後の明治四十五年（一九一二）五月十五日、夏目漱石による「『土』に就て」と題する懇切丁寧な序文を添え「春陽堂」という出版社から単行本として公刊された。その後、全集（全七巻別巻一。同じく春陽堂）の第一巻（昭和五十一年十一月二十日発行）に収められており、私の手元にも並んでいる。『土』はまた、新潮社文庫、旺文社文庫（今では絶版か）などでも読むことが出来る。夏目漱石の序文や「長塚節氏の小説『土』」[5]には作品に関する紹介や社会的な背景の解説、そして作者の節を登用した理由や連載中の状況などについて詳細な説明を施している。

それまでほとんど無名であった長塚節に連載小説の執筆する機会を与えたのは他ならぬ夏目漱石である。漱石は第一高等中学校在学中から親交のあった正岡子規の影響もあって早くから俳句の創作を嗜み、新聞『日本』（陸羯南が主幹。明治二十二年二月創刊）のなかの俳句欄に投稿していた。同紙「日本俳壇」への投稿者には帝国大学の出身者や自由民権運動に関心をもつ人々などの有識者が多かった。「日本俳壇」は後の俳誌『ホトトギス』（明治三十年愛媛県松山で創刊、正岡子規主宰。翌年東京に移り高浜虚子が編集。やがて総合文芸誌へと発展する）の基盤ともなり、漱石の愛読誌でもあった。

漱石がイギリス留学中（明治三十三年から同三十五年）に、病床の子規を慰めるために書き送った書簡は、一部が『倫敦消息』と題して『ホトトギス』誌上（明治三十四年五月から六月）に発表された。すでに子規から短歌の手解きを受け、私淑していた節が、子規の長逝（明治三十五年九月十九日）後に発表した写生文や短編小説、とくに紀行文「佐渡が島」（明治四十年十一月の『ホトトギス』第十一巻第二号）が漱石の目に止まり、「二、三年前節氏の佐渡紀行を読んで感服したことがある。紀行文であったけれども普通の小説よりも面白いと思った。」という感想をもたらし、続けて「氏は若

高崎経済大学論集　第47巻　第４号　2005　264頁～247頁

長塚節『土』のなかの「環境」考

千葉　貢

はじめに

歌人でもある長塚節（ながつかたかし）の唯一の長編小説『土』という物語は、明治四十三年（一九一〇）に当時の東京朝日新聞に連載されたものである。物語の舞台は茨城県の東部を流れる鬼怒川沿の寒村であり、農民たちが登場する。物語には多様多彩な自然が描かれ、人間を育む環境、特色を醸し出す地元の気候風土などが反映されている。自然との触れ合いが人生に彩りを添えてくれる大事な脇役たち、助演たちであるということを教えられ自然を愛惜しないではいられない。

『土』は自然主義文学の代表的な作品である。「もの」の少ない時代に書かれたとは言え多種多様な人々がおり、地元と呼ばれる家郷の環境や気候風土と関わり合うことが人生という物語を創造し、豊かな内容を構築する素材である。「環境」は工場で人為的に大量生産された無機質な「もの」と異なり、変化に富む春夏秋冬と共に、それぞれの季節を彩る植物や動物たち、民俗習慣、風俗、文化教養、歴史などが息づいている。物語は自然と人間を中心としながらも、すべてが身近な教師や教材であり、心身を育み鍛える資糧にして人生の伴侶、物語の名脇役、名助演たちであるということを重ねて強調しておきたい。環境に生かされているのは、決して人間だけではないということである。

物語の『土』は時の制度上、小作人と呼ばれていた貧農である勘次一家（祖父の卯平、夫の勘次、妻のお品、娘のおつぎ、息子の与吉）を中心としながら、自然と人間たちの「環境」をもの語っている。今や、自然との共存共生のためにも、もっと便利に、もっと楽になるだろうと他律的に期待したり、ない「もの」ねだりの進歩発展、開発、スピード化を黙認したりするのではなく、身近なところに今もある「もの」や「こと」を見つけだし、その「もの」や「こと」を受容したり活用したりすることが「環境に優しい」行動になり、何よりも「心」を痛めず壊さないのではなかろうか。もっと便利に、もっと楽にと「無痛文明」[1]という「ファーストフード」[2]を求めて「ケータイを持ったサル」[3]を繁殖させ、山の熊に襲われるだけではなく「事実は小説よりも奇なり」の如く、サルにも劣り人としての道にも悖る犯罪や被害が増えているのはどうしたことであろ